

ドウブラウカ・ウグレイシイチ

岩崎稔訳

『バルカン・ブルース』

未来社

亀山郁夫

一九八〇年代後半の世界的政情不安のなかで燃え上がった民族主義の嵐が、ヨーロッパの火薬庫と呼ばれるバルカン半島を血の海に沈めたことは、今もって記憶に新しい。ボスニア協定以後の今もお、新しい和平の枠組みをめぐる模索は、いつ終わるとも知れず続けられている。

本書は、内戦時にアムステルダムに亡命したクロアチア出身の女性ロシア文学者が、戦後のユーゴの歴史にみずからの精神史を重ね合わせつつ、その悲劇の起源とメカニズムを探ろうとしたエッセー集である。何よりも、戦争、国家、民衆をめぐる繰り出される卓抜なレトリック、時にクンデラともみまごうアフォリズムの数々が新鮮だった。

周知のように、戦後のユーゴは、スターリ

ン主義と袂をわかつたチトー政権のもとで「自主管理」と呼ばれる独自の路線を歩み、共產圏では異例ともいえる政治的安定を誇ってきた。ところが、指導者の死と、ペレストロイカを震源とする八〇年代の政治的流動化によって、すでに綻びかけていた連邦システムはすみやかな瓦解をとり、ナチズムの蛮行すらほうふつとさせる、数十万人の大規模なジェノサイドを生んだ。

著者のウグレイシイチが、そうした現実の奥に熟視するのは、全体主義システムがどのように形づくられるかという一種の実験モデルである。いくつもの戦火と抑圧の記憶にもかかわらず、二〇世紀末の「文明国」を兄弟殺しに導く狂気とは、果たしてどのようなものか。そこでは、すべての歯車が狂った動きを見せていた。過去の清算のうえに進行する「民族浄化」のプログラム、反転しあう正義と悪の観念、権力者と知識人との忌まわしい共犯性。マス・メディアの「暴力」。さらには忘却と想起という二重のテロルによって刻まれる偽りの「正史」。なかでもとくに興味深いのは、「数年間にひとりの罪もないセルビア人農夫の尻の穴から始まった」と書き、権力に酔いしれるメディアと、メディアが垂れ流すイメー

ジ同士の戦争としてユーゴ悲劇のメカニズムを説明していくくだけりである。メディアによる洗脳が、人々のパーソナルな自己や歴史を忘れさせ、無意識のうちに彼らを自己正当化と独善の道へと軌道修正させていくという指摘は、まことに鋭い。ユーゴ内戦とは、まさにハイパーリアルな世界での戦争ゲームでもあったことを理解させてくれる。

ウグレイシイチの凄さは、すべての現象とメカニズムに「嘘」を見ぬく驚くべき批評眼にある。だから時おり、一見、反時代的ともいえる過去へのノスタルジーが顔をのぞかせるのも無理はない。つまり、怒りはそれほどに深いということではないか。「一〇年以上も経ってから自分たちの共産主義という亡霊を処刑する」無節操、権力欲に駆られた為政者、知識人、いや、彼らをも含む国民全体のメンタリテイの悲惨さ。彼女に「亡命」を決意させた理由とは、きつとそのようなものであつたらう。そしてその絶望がたどりつく先とは、ユーゴの悲劇を文明論的視座にまで棚上げせざるをえない猛烈なベシミズムであり、「歴史の夏至」以後のポストモダンの英知に託されたはかない望みなのである。